

# 動機づけの正体 —主に感情の役割に注目して—

Annual Report

速水 敏彦（中部大学人文学部心理学科教授）

## はじめに

ただ今ご紹介いただきました速水でございます。この大学は、動機づけの学部を作ったところだというわけで、私もいつか、遠くからでもいいから眺めてみたいという気持ちはあったんですが、たまたまこうやってお招きいただきまして、ありがとうございます。

きょうは、動機づけの正体ということでお話をさせていただきますが、正直なところ、私は動機づけということを経験してきてきたんですが、それで本当に正体が見つかったのかといいますと、本当はつかめなくて、ますます分からなくなっているというところが本当のところなのですが、私が今見ている範囲で、こんなふうに考えているということをお話をさせていただきたいと思います。そして特に、感情といったものの関わりといえましょうか、そういうことでお話をさせていただきたいと思います。

きょうの話の流れでございますが、まず、最初に動機づけとは何かとか、動機づけの今の研究の流れとか、そういうのをちょっとだけお話しさせていただいて、それから動機づけの構成要素について、次に特に学習意欲を例にして、ポジティブ感情が今のところは学習意欲のところでは強調されているという話をさせていただきます。それから、しかしネガティブな感情も動機づけということに大事じゃないかなということをお話させていただきます。それから、今ちょっとだけ紹介していただきましたが、仮想的有能感という概念も、有能感というわけですので、一つの動機づけの基になっているものということで、それに関連した話もさせていただきます。それから一番、最後はごく最近の話でございますが、動機づけといいますと仕事の動機づけだとか学習の動機づけだとか、そういうことが主でございますけれども、私は人間が無意識に行動していることでもその背景に動機づけがあるというふうに考えていいんじゃないかと思えます。特に家事なんかは、家事の動機づけなんていうことは言いませんけれども、家事に対して一生懸命やれるときもあれば、やりたくないときもあれば、いろいろあるわけでございますが、そういったところの動機づけをどういうふうに考えるのかという話をさせていただきたいということでございます。

## 1. 動機づけとは何か

さて、動機づけって何かということなのですが、この所が一番根本ですが、しかしこの所がなかなか本当は定義しにくいところかなと思います。研究者の多くの人は、おそらく、目標、思考行動を引き起こす潜在的なエネルギーというような感じで捉えているんじゃないかなと私は思うのです。ですから、ベクトルのイメージとかいうふうに書いている人もいます。主体が何らかの目標に向かう力といえましょうかエネルギーですね。それを動機づけと言っているのかなと思います。

ここで、目標ということでございますが、目標とは、原則的に人間が抱く全ての目標だということに私は思っております。先ほど申しましたように、仕事の動機づけと学習の動機づけ、何かこれは社会的に望ましいものといえましょうか、やっぱりやったほうがいいようなものの動機づけなのです。しかしながら、私は望ましくないものに動機づけをもつ人も結構いるんじゃないかと思えます。それは例えばヒットラーとか、ああいう人が、やる気がなかったとか動機づけがなかったかということ、それはそうではなくて、やっぱり方向は悪かったけれども、それなりの動機づけがすごく高い人だったというふうに考えられるんじゃないかということでもあります。

それから、その目標というのは、もちろん自分でこういふふうになりたいということで設定する目標もございしますが、それだけではなくて、こうしなさいということで人から与えられた目標というものもあります。さらに先ほどのように、家事のように、あまり目標として意識しないけれども、自然に昼になったら食事の準備をするとかいうような形での無意識的な目標といえましょうか、そういうものもあるんじゃないかなというふうに思えます。

その潜在的エネルギーの構成要素はどういうふうに考えたらいいかということなのですが、これは昔からの考え方で考えてもいいんじゃないかなということで、私は主体が目標に向けて持つエネルギー、これは動因とかいうような言葉でよく言われるんじゃないかと思えますが、そういうものを片方に置いて、もう片方は目標が主体を引きつけるエネルギーといえましょうか、そういうのを誘因と呼んでもいいものじゃないかと思うんです。そういう押すような力と引く力、そ

う二つで考えていくのがいいのじゃないかなと思って  
います。特に動因の所が、これから話しさせていた  
だきますように、感情が主な構成要素として考えら  
れるのじゃないかなと思います。引く力のほうは、き  
ょうの話にあまり出てこないのですが、正直なところ、あ  
まりよく、きちんと私の頭の中でもまとまってお  
りませんが、価値とかというような言葉ですが、そ  
ういったものが重要な構成要素ではないかなと今  
のところ感じています。

主体と目標の相対的強さと動機づけということ  
についてですが、普通先ほども言いましたように、  
主体がいて目標があって、それに向かう潜在的な  
エネルギーが動機づけということになりますが、  
目標のほう、要するに引く力が相当強いような  
場合もあります。ある先生の授業は非常に魅  
力的だということで、どの子も、主体のほう  
のエネルギーがあまりなくても、やる気にな  
るとかいったようなもので、それはその先生  
が来れば、そういった学習意欲がわくわけ  
で、状況的な動機づけとかいうようなこと  
に、そういう言葉を使ってもいいのかなと思  
っています。

それは人ではなくて、理科の教科だったら  
みんなは一生懸命やるだとか、こういう場所  
に来ると、みんなは何らかの仕事をして一生  
懸命やるだとか、そういうようなものは誘  
因のほうに非常に強いと考えられます。引  
く力が強くて誰にもそこで動機づけが起  
こる。普通はあまりいろんなことに関心  
を持たない人も、非常に興味を持って、  
そのことはやるかといったような形  
のものがあるかなと思います。

もう一つは、誘因のほうはあまり強  
くなくても、その人が主体のほうの動  
因のほうに非常に強くてやる気  
を起こす場合です。その人はどうい  
うような目標であっても一生懸命  
やるか、そういうような形のもの  
があるような気がいたします。

さて、私も何年か動機づけの研究  
をしてまいりましたが、大学院を出  
て、主に最初にやりましたのは、  
この達成動機づけの原因帰属理  
論ということでございまして、  
結果の原因をどう考えるかが動  
機づけを規定するものですね。成  
績が悪かったのは努力不足のせい  
だとか、能力不足のせいだとか、  
そういう原因の認知の仕方が次  
のやる気に影響しているのだと、  
そういうような研究を、その理  
論に従ってやってきました。で  
すから、その原因の認知こそが  
大事だということになります。

それから、自己効力理論、これ、私  
特には研究はしてないですけども、  
やっぱり目標達成のための自分  
の能力、自分はこれこれをする、  
頑張っていくだけのそれだけの  
能力があるんだと、あるいはその  
能力がないんだといったような  
自己効力とかいった言葉もあり  
ますが、これは能力の認知がやる  
気を支えるという見方です。だ  
から認知が大事だというような  
話かと思えます。

さらに比較的最近では、達成目標  
理論だとか、自己決定理論だとか  
いうのがございまして、これはい  
わばなぜやるのかということに  
関する認知といってもいいんじ  
ゃないかと思えます。面白いから  
、楽しいからやるかというのも  
あれば、成績を良くするために  
やる、成績を良くしたいから、  
みんなに褒められたいからやる  
かということで、そのwhyに答  
える、なぜやるのかといったよ  
うなところが重要じゃないかと  
思っています。そういったものを  
まとめまして認知的動機づけ理  
論といいたらいかがでしょうか、  
そんなような言い方がされてき  
たのではないかと思えます。

ただ、私も大体そういうものに  
のっかって、研究はずっとして  
まいりましたが、どうも本物をつ  
かんでないといいたらいかが  
でしょうか、どうも違った所を  
触っているといいたらいかが  
でしょうか、そんな気が一方  
ではしております。認知、それ  
は確かにあるけれども、本当に  
人の行動につなげる力になって  
いるのはむしろ感情のほうで、  
そちらのほうこそっと注目を  
すべきではないのかなという  
気持ちが強くございまして。

認知には必ず感情が伴っている  
んじゃないかという見方もあり、  
もちろん原因帰属理論にしま  
しても、努力不足への帰属をし  
ますと、努力しなかったとい  
うことで罪悪感も感じることが  
あると思えます。しかし一方  
では、努力不足だから今度は  
まだ努力すればやれるんだと  
いうわけでの自信といいたらい  
かがでしょうか、そういうもの  
がある。そういった感情が当  
然背後にはあります。しかし、  
能力不足に帰属しますと、あ  
きらめとか、無気力とか、も  
う能力は決まったものだから、  
また同じようなテストを受け  
たらやっぱり駄目だろうなと  
かいうような感情が働くわけ  
で、結局その感情の在り方  
こそが、直接は動機づけとい  
うものに反映しているんじ  
ゃないかなというふうに思  
います。

自己効力感というものも、効  
力期待というふうには、期待  
というふうにはいいまして、  
何かこれくらいはできると  
いうことで考えて推測してい  
るわけですね、認知に近

いのですけど、かなりそれは主観的なものでして、どのくらいできるかといった自信という言葉で表現してもそう違いはない。自信であれば、これは感情というふうに言ってもいいんじゃないかなということであります。

それから、自己決定理論も、内的調整というような言葉がありますが、これはいわば楽しいからやるとか、面白いからとか、感情としてはそういうことになりますし、それから取り入れの調整というのは、恥ずかしいからやるのだとか、不安だからやるのだとか。それから外的調整は、強制されてやるというような面もありますと、これは従わないと怖いからやるとか、そういった面で当然感情が働いている。

ただ、同一化的調整というのは、普通重要だからやるとかいうふうに言いますが、これは感情といえるかどうか、ちょっと分からないのですが、やりたいからやるというようなふうにとれば、感情といえるのではないかなと思います。

## 2. 教育場面での内発的動機づけ

教育場面の内発的動機づけについて考えたいと思いますけども、認知的葛藤とかいうような研究がありまして、そしてそういう認知のずれから内発的動機づけというものが生ずるとしています。従って、何か疑問を持たせるような刺激を構成して、そして内発的動機づけを高めるような教育が大事だということが言われ始めました。ちょうど私どもが大学院の頃でしたか、波多野誼余夫先生が新書を出されて、この内発的動機づけということがすごく言われ出したわけなんです。しかし、先ほど言いましたように、要するに内発的動機づけは面白いから、楽しいからやろうと、そういうふうに言えるわけですし、感情的な要素が強いという言い方もできると思います。

結局そういうような考え方が出ましてから、それまでの賞罰みたいなものはどうもあんまり良くない、本人自身が、課題が面白いとか楽しいとか、そういうことで勉強をさせるようにしなくてはいけないということで、先生がたはいろいろ課題の工夫をされたり、質問の工夫をされたり、内発的動機づけを高めることこそ大切なんだという方向に教育は動いていったんだと思います。

しかしながら、実際これが本当に功を奏したんだ

ろうかと思います。なかなか評価は難しいんですけども、それによって以前よりすぐみんなが興味関心を持って勉強するようになったとは、これはなかなか正直実際問題としては言えないんじゃないでしょうか。もちろんこの考え方が悪いわけではありませんけども、それによって目覚ましい学習の改革があったとはなかなか言えないような気が致します。

先ほど、状況的動機づけと特性的動機づけなんてことを申しましたが、要するに私は、先生がたは一生懸命面白い課題、誘因の高い、引く力の高い課題を与えて、そして授業に集中させて状況的な学習意欲を高めようとしたと考えます。それは結局、そういうことをいろんな所で繰り返せば、それが主体のほうに跳ね返って、動因を強くすると言いましょか、押す力に影響を与えて、自分からいろいろ調べてみようとか、自分で問題も考えてみようとか、要するにそういう授業を繰り返す中で、誘因の高い課題を与えて繰り返す中で、個人の動因を高めると言いましょか、そういうことを狙ったものではないかなと思います。しかし、それが本当にうまくいったのかなというようにことが疑問としてあります。

これはずいぶん前の、1990何年と書いてありますが、自己決定理論の動機づけの分類です (Figure 1)。自己決定理論と申しますのは、従来の内発的動機づけ、外発的動機づけ、二分法的に見るのではなくて、むしろ段階的のと言いましょか、そこにはいろんな中間のものがあるというふうに考える考え方だと、それだけではないのですが、そう見てもいいんじゃないかと思います。

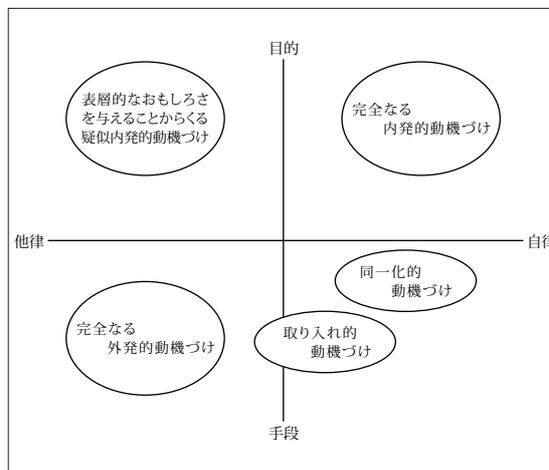


Figure 1 動機づけの分類

それで、左下のほうに、完全なる外発的動機づけと書きました。これは本当に勉強しなさいと言われて仕方なくやるということであれば、これは外発的動機づけということになるかと思えます。非常に他律的なこととなります。その次が取り入りの動機づけと申しまして、これは一応自分からやろうとはするのですが、試験ですべったら恥ずかしいなあとかいうことで、試験があるから、不安だから勉強するというようなことで、自分からやろうとはするんですが、非常に消極的な形でやろうとするというのだと理解していただきたいと思えます。それから同一化的な動機づけと申しますのは、もうちょっと積極的ですし、自分にとってこういう勉強は将来非常に大切だと、大事だから勉強しようということ。別に好きではなく、面白くもなく、楽しくもないんだけど、自分の人生にとって重要だからやろうというふうに考えていいかと思えます。一番上は完全なる内発的動機、いわゆる楽しいからやるとか、面白いからやるとか、理解することが楽しいからとかいったようなことになりまして、自己決定理論でいっていますのは、左から右に、要するに他律から自律へということに、いろんな段階があるということなんですが、彼の理論では、要するにそれが横軸になります。

横軸が他律から自律ということになりまして、縦軸のほうは目的と手段と書きました。これは従来の二分法的なものでして、やること自体が目的のもの。ゴルフ楽しいからやるということであれば、これは内発的動機づけでやっているということになります。仕事はとにかくお金が欲しいからやる、お金のためにやっているということでありまして、これは手段ということになりまして、外発的動機づけということになるわけですが、それは完全なる外発的動機づけと完全なる内発的動機づけといったところですが、自己決定理論では要するに外発と内発の中間といいたいでしょうか、従来の外発的動機づけにもいろんなレベルのものがあるというふうに示唆したところが新しいんじゃないかと思えます。取り入れも、それから同一化的動機づけも、ある意味では手段だというふうに考えられるのですが、その取り組みへの自律性の程度というのは違いがあるということかと思えます。

そういうわけで、二つの次元で置くとこんなことになるんじゃないかなというふうに書いたんです。左上の所に妙なものが書いてあるんですけど、これは表面

的な面白さを与えることからくる疑似内発的動機づけと書きました。これは他律的で目的だといえます。これは何を言いたいのかといえますと、子どもたちがいろいろ楽しい、面白い課題を与えられて、そして確かにその場では一生懸命やるわけですけども、それが本当の意味でいわば内在化とか内面化して、他の場面でもまた一生懸命やるということにはなかなかならないで、そのときだけ一生懸命、面白い課題を与えたときだけやっているというような場合を想定していただきたいと思えます。それでむしろ、面白い課題を与えられるのを待つといいたいでしょうか、「先生もう何か面白い課題与えてくれないと僕勉強しないよ」といいたいでしょうか、とにかく面白くしてくださいよというような、むしろ受け身的な態度を、一方で形成したということもあるかもしれないというようなことを考えたわけです。結局そういうことを言いたいだけなのです。

なぜ内発的動機づけが十分促進されないかということですけども、あくまでその状況だけのことで、動因としての内発的動機づけが高まることはなかったということになります。要するに誘因のところだけで止まっていたというようなことになるんじゃないかというふうに私は思っています。むしろそのような誘因を与えることが比較的習慣化しましても、基礎基本の学習となる誘因感の低い課題は現に存在しますし、大体面白い課題は、基礎基本の学習のところではなかなか使えないようなことが実はあるかと思えます。そうすると基礎基本の誘因感の低い課題に対して、むしろ拒否する、こんな面白くないものやれるかというようなことも多々生じると考えるわけです。一方、これまでの教育の流れから学習過程ではネガティブな感情に向き合わねばならないという認識がどんどん希薄化していきます。何でも面白ければいい、面白いものだけに対応するというような姿勢が生じてきている危険性があると思っています。

これは結局同じことを言っています。これは飛ばしましょう。だから、引き出される誘因のところは、短期的な感情だけが働く。そしてそれは非常に他律性の、先生が面白い課題を持ってきて、自分で面白い課題を、何か面白いものを児童・生徒が見つけてくるんじゃない、先生が与えているだけです。非常に他律的。それを先生は繰り返すことで、子どもが本当に自分から押し出される動機づけを高めて、長期的に対応、自分からやっというふうにならしてほしいと

いうことを期待していたと思うんですが、そこがあまりやっぱりそううまくはっていない、というのが本当のところじゃないかなと。最近、いろいろな国際比較研究だとか、全国の学力検査でも、どのくらい学習に興味、関心があるかとか、そんな調査もございませうけども、なかなか日本の子どもたちは、そういう興味、関心というのは決して高まっているわけではないような気がいたします。

これは、<sup>もりひろし</sup>森博嗣という、ご存じの方もあるかもしれませんが、名古屋大学の工学部の建築学科の准教授をしておられて、今はもう小説家だけをやっておられる方ですけど、その方が、『やりがいのある仕事という幻想』というような本の中に、こんなことを書いて、私は割と共感したので抜いてきたのですが、「ここ数十年の傾向として、子どもたちは勉強の楽しさを知ってもらいたい、社員には仕事の楽しさを見つけてもらいたいという考えが浸透している」「番組も授業も楽しさの捏造のために間延びするから、本当にそれを知りたい子どもや若者は、じれったくて引いてしまうだろう」「勉強なんてものは、そもそも遊びに比べたら面白いはずがないのに、あたかも面白い、楽しいというふうに見せかけて、子どもをだますようになった」

「算数の楽しさを知ろう、科学は面白いものだよ」というようなせりふが教育の世界ではあふれかえっている。子どもたちが笑えば成功。それで好奇心が育つなんて、大人たちは夢を見た。自分たちが子どものときよりも、今の子どもは幸せだとほほ笑ましく眺めたいだろう。でも、子どもの方は犠牲になっているのも同然である」などと書いています。

下の言葉は、ヤクルトの宮本選手の退団会見での発言です。「好きで始めた野球だが、プロになった瞬間に仕事になった。仕事としては一度も楽しいことはなかった。しかし、仕事として向き合った19年間は自分の誇りといえる」仕事として野球に向かう姿勢は単に楽しいからということとは違うというような話は、興味深いものがあります。楽しさ、楽しさということ、今の時代はあまりに強調し過ぎているようなところがあるのではないかなと思います。楽しさの水準がどんどん高まると、なかなか人はもう感動しなくなってきてしまいます。おそらく昔の子どもだったら、今の先生が与えてくれるような課題ですごく感動して、頑張ろうという気持ちを起こして、そういう押す力そのものも育ったかもしれないんですけども、日頃、低い感動の

レベルにあって、あまり楽しいこともないような人が楽しいことを与えられたときの感動のレベルと、日頃いっぱい面白いこと、楽しいことを見たりしている人がそれに会ったときの感動のレベルはずいぶん違っているような気がしまして、むしろ今の人たち、もうちょっとそれぞれの学習なりに苦しみをもらおうといましようか、そういうことも知ってもらったほうが、やる気というのはあるいは高まるんじゃないかなと、そういうちょっと私は暗いことを考えているわけです。

ですから、なかなか内発的動機づけだけで教育学習場面を全ては構成できないのではないかというのが私のスタンスとして、授業科目を全て本人が選択できるわけではありません。今はただ、だんだん大学でも、高校までも選択科目が増えまして、好きな科目だけで、そして入試も好きな科目だけで受けられればいいということになってきているわけですけど、果たして今それでいいのか。大学入ってきて、全くやった教科がないということで、社会人として出て行っていいのかなという気持ちもあります。基本的にはやっぱり学校では反復練習して身につけることが多いように思います。それは決して面白いことではないんです。中学生になれば、競争的な受験勉強にもどうしても遭遇せざるを得ないということもあります。一般には子どもは学習にはポジティブよりネガティブな感情を持ちやすいということになります。

私は基本的には、この図で、この内発的な動機づけを高める教育というのは、もともとあまりやる気がなかった子に対して、ボンと右上の完全なる内発的動機づけのところを持っていこうとしたといいたましようか、そういうものを作ろうとしたというようなイメージがありまして、それがずいぶん無理があったような気がいたします。そういうのではなくて、むしろ左の下の完全なる外発的動機づけ、非常に他律的な動機づけの部分にいる人は、結構私は子どもたちでもいるんじゃないかなというふうに思います。そういう人を少しでも自律的にまずは取り入りの動機づけにして、さらには同一化的動機づけにして、理想としては内発的動機づけにするといいたましようか、そういう地道な働きかけといつか、そのほうが本当の意味での動機づけが高まるんじゃないかと考えます。私は、本当に楽しい、うれしいでやるのは理想ですけど、そういうものがなかなか全ての教科でそれってというのは難しいと思いますので、少なくとも右のほうの自律的な動機づけというこ

とをよく言うんですけど、自分にとって大切だとか意味があるとか、それくらいのレベルにいけば、十分ではないか、そういうような教育でいいんじゃないかなというふうに私は思っております。

### 3. ネガティブ感情への動機づけへの影響

これから話が少し変わりますが、ネガティブ感情への動機づけへの影響ということで、ネガティブ感情も時には動機づけを高める働きをするんじゃないかということをお願いしてここに出しました。動機づけ研究の歴史の中で、やっぱりネガティブ感情というのはあまり評価されてこなかったと思うのです。大昔の要求水準の研究というのがございますけども、それによれば成功すれば、次に前より高い目標を立てる。失敗すればがっかりして前より要求水準を下げる。これは定説なんです。果たして本当にそういうことばかりかなということをおもいます。

失敗して、能力不足への帰属をすると恥ずかしいというような感情が出て、動機づけは低下するんですけども、能力不足だから、固定的なものだからというものもあるんですけども、でもそうばかりでもないものもあるような気がします。それから学習性無力感で無気力になってしまう。そういう人は、抑うつだとかいうような、ネガティブな感情といいますか、それは非常に動機づけを低下させるものになっているという話がほとんどかと思っております。でもじゃあ日常経験で常にそうかという、必ずしもそうではないと思うんです。一番わかりやすいのは、運動競技でのリベンジです。プロ野球を見ている、負けたら今度はリベンジしたいなんてすぐ言うんですけど、他の運動競技なんかでもリベンジという言葉が最近よく出ていて、それはやっぱり負けたから今度こそ頑張る、今度こそ動機づけを高めるというわけで、ネガティブな感情が動機づけを高めている、そういうような話かと思っております。

いろんなプロフェッショナルの話もテレビなんかで放映されていますが、そういうものを見ている、やっぱり失敗経験のネガティブな感情が核になって、大成功をもたらす力になっているという話は結構多いと思います。しかし、動機づけ研究では、ネガティブな動機づけが行動を促進するというような枠組みはあまりないというのが本当のところだと思っております。

今回ノーベル賞の中村修二さんですか、新聞の見

出しにもでかかど書いてあったんですけど、怒りが全てのモチベーションだったと述べておられます。怒りがなければ何も成し遂げられなかったというようなことを、この人はストレートに言っているんですけど、やっぱり人間というのは怒りとか、そういうネガティブなことが動機づけの中核になっていることも確かにあります。あまりそういうことを語らない、語ると恥だとか恥ずかしいとかいうようなことがあるのかもしれない。運動だったらいいんだけど、私は怒りで研究者になったとか、そんなことを言うのはちょっとまずいなどいうふうに思う人が多いんじゃないかと思いますが、そういうところもあってかもしれませんが、でも現実にはそういうことはあり得るんじゃないかなと思っております。

心理学のいろんな研究を見ましても、ネガティブな感情のエネルギーが非常にポジティブな感情のエネルギーよりも強いといいましようか、そういうことはよく言われているんじゃないかと思っております。罰や負の強化の効果は、報酬や正の強化の効果よりも大きいとか、利益を得ようとするよりも、損失を避けようとするという知見があります。何かを回避しようとする目標は生死に関係するけど、接近目標は繁栄に関係するのみだから、それほど強いものにはならないかというような話もあります。

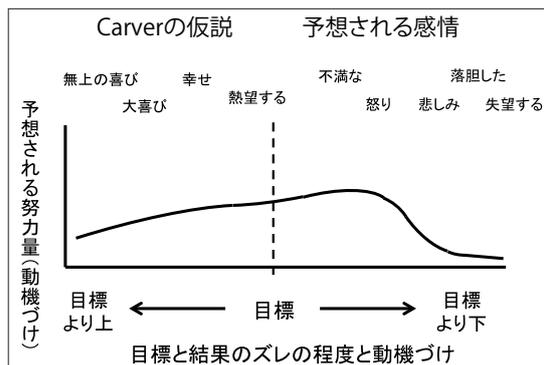


Figure 2 Carverの仮説と予想される感情

これは、カーバー (Carver, C.S.) という人が、あくまで仮説ですので、綿密な実験的証拠を出しているわけではなかったと思いますが、このようなモデルを出しております (Figure 2)。横軸は目標と現実のずれです。目標と結果のずれでして、左へいく程、結果が目標より上だったと。だから左のほうは要するに悠々成功したというふうにお考えください。右のほう

うは、目標より実際の成果が下だったということとして、目標は非常に高かったけど、結果は相当開きがあって、とてもじゃないが目標に届いていなかったというところで、いろんな感情が起こっているんですが、そのときに予想される努力量、今度どのくらいやりたいかというのは、こんなふうに予想されるということを行っているわけです。左のほうは悠々成功したので、大喜びしているわけですが、じゃあこれからまたそのことについて一生懸命努力しようとするかという、非常に満足感がありまして、それほど今度はそう頑張らなくてもいいやという人が多いと思うんです。昔の要求水準の研究では恐らく左のほうが高く右のほうが低いと、そういうことだと思うんです。成功すればますますやる気は出る。失敗すればやる気を失うというのが定説といえましょうか、そういうことではなかったかと思いますが、この人が予想しているのは、むしろ一番やる気が高い所は、目標にちょっと届かなかったとところです。そういうときは非常に不満だと感じています。もうちょっとやればできたのにか、くやしいなというようなことに普通だといえますが、そのときに一番今度は頑張りたいということで動機づけが高まると、そういう予想というかモデルになっているわけですし、これはかなり現実というものを反映したものになっているんじゃないかなと私は思っております。

これは本当に簡単な、私がやった調査なんですけども、英語の進級テストに①ぜひ合格したいと思って勉強してきた合格した人、それから②ぜひ合格したいと思って勉強してきたが不合格だった人、それから③絶対不合格になりたくないと思ひ勉強してきた合格した場合、それから④絶対不合格になりたくないと思ひ勉強してきたけど不合格だったというわけで、一応、接近動機と回避動機というのと、実際に成功したか失敗したか、そういうので作って、その人たちがいろんな感情をどのくらい感じるかということで、感情をいくつか設定しました。それを評価させて、それからさらに、そういう人はどれくらいこれからそのとき努力しようとするかといった努力量も5段階で評定をさせました。

まず、今後どのくらいやりたいかということについては、接近動機のほうでもやっぱり失敗した場合のほうが、要する①と②を比べているんですけども、ぜひ合格したいと思って勉強してきたけど不合格だったと、

不合格だった場合のほうが不合格だったから頑張りたいというわけで頑張る。成功した場合はそこで満足してしまう。回避動機の場合も、これも失敗したほうがより努力したいと。失敗したほうが成功した場合よりもやる気が高まっているということになります。

感情のほうではいろいろありましたけど、これは有意なものだけなんですけど、リベンジしたいとか、いら立つというような感情については、リベンジしたい程度が強いほどこれから頑張りたいとか、いら立つ程度が高いほど努力量が多いというように②の接近の失敗で関係がありましたし、④の回避の失敗でも、リベンジしたいとかくやしいという感情の強さと努力量が関連しているということで、ネガティブな、リベンジしたいとかくやしいとかいら立つとかいう感情が、より頑張りたいといった動機づけを規定しているのかなと考えました。

これも似たようなものですが、別の場合でして、最上位に近い成績で合格した時と、それからぎりぎりの成績で合格した時と、もう少しのところでは不合格になった時と、最下位に近いところの成績で不合格になった時に、そのことについてどのくらい今度勉強したいかとか、どのくらいそれについてやる気があるかということを探ったものです。これも要するに、成功した場合よりも失敗した場合のほうがより頑張りたいということで、もちろんこれは、その質問の上だけのことで、実際の場面で取っているわけではありませんが、やる気は、失敗したときに、特にもうちょっとのところでは失敗したといったときに、一番高くなると考えられます。

#### 4. 動機づけの神経基盤

さて、行動接近システムとか行動制御システムということが最近いわれています。行動接近システムを持ちやすい人とか、行動抑制システムを持ちやすい人ということになりますが、接近動機づけの背後にあるとされる神経基盤を行動接近システムといっているようです。私もこのことについてそう詳しいわけではないのですが、そういうふう書いてあります。行動接近システムはBAS、Behavior-Action Systemといいますが、質問紙でこれを測っているんですけど、私は欲しいものを手に入れるためには格別努力するとか、私は欲しいものを手に入れるときに興奮し活気づけら

れるとか、欲しいものを手に入れるチャンスを見つけるとすぐに動き出すというような人、そういう傾向の強い人は行動接近システムが働いている人だということになります。それに対して、行動を抑制するシステムがより強いような人もおります。BIS、Behavior-Inhibition Systemというわけで、回避動機づけの背後にあるとされる神経基盤でして、誰かが私のことを怒っていると考えたり知ったりすると、かなり心配で動揺するとか、何か良くないことが起ころうとしていると考えると、だいたよくよ悩むとか、間違いを犯すことを心配しているとかいう人です。そういうようなシステムと感情とどういう関係になるかということなのですが。これは特に怒りを中心に挙げているのですが、怒りと先ほどのBASとかBISとかいう行動システムとが、どういうふうに関係しているかという研究を抜き出しただけのものです。成績が良ければボーナス単位が与えられるとして、課題を遂行させます。しかし実際には与えないで欲求不満状態を作ります。そういったときにBASと欲求不満の感情の関係が高く、それはBASの影響が強いということです。BISとは関係がない。それから、不安と怒りを同時に喚起する活性化シナリオを読ませる。感情を尋ねて怒りと緊張に分類する。怒りも不安も同時に起こすようなシナリオを読ませまして、それぞれを評定させるのだと思いますが、感情を書かせて分類して、そしてBISとBASとの相関を見ると、緊張という感情はBISの間に正の、怒りはBASの間に正の相関がありました。それからニューヨークのテロの2週間後に感情を尋ねました。恐怖を感じている程度の高い人とはBISとの間に相関があって、怒りを感じている人、怒りの程度はBASとの間に正の相関がありました。それからさらに、これは脳の話ですけど、左前頭前野に接近動機づけの機能、右前頭前野に回避動機づけ機能がありますということですが、どうも怒りは左前頭前野の接近動機づけ機能がある所の活動を増大させるらしいということが言われております。

ということで、ネガティブな感情の中にも、接近傾向を持つものがある、特に怒りとか不満、そういった感情はもっと対象に近づこうと、そういう力とも関係しているらしいということになるかと思えます。

これは非常に曖昧なのですが、意欲がわく失敗の条件ということになります。もちろん前提として何らかの学習で成功することが求められておまして、失敗

後に、全くもう成功できないという場合には意欲はわからないわけですし、やっぱり成功期待が生じている状況でないといけないと思うんです。そして失敗の原因をある程度変動可能な、働きかければ変化できるというような要因に帰属させているということが必要になってきます。それから自尊心は全く低くなっている状態では向かうことができませんので、自尊心がある程度高いというような状況。それから下のほうはおかしなことを書いてあるようですが、自己概念が、あることについての自分のイメージと、今失敗した、例えば算数で失敗したということでの自分の概念が、国語や社会やその自己概念と別だといましようか、算数で失敗しても国語では成功する可能性があるとか、自己概念が分化していることを言いたかったわけです。そういうようなところで、要するに子どもの失敗経験にうまく先生たちが働きかけて、その子どもたちがくやしいとかいった、ある程度情動が喚起している状態のところをサポートして、そしてやる気を起こさせていく、そういった経験というのは大事かなというふうに思います。

失敗のそういう克服経験が自律的動機づけの形成を促すのじゃないかということになりますが、この自己決定理論を出しておりますデシとかライアンという人によりますと、そういう自律的動機づけ、これは先ほど申しましたように、例えば大切だからやるとか、そういったものを想定していただければいいと思えますが、それを果たさせるためには次の三つの欲求を満たすことが必要だと言っていて、有能さへの欲求だとか、自律性の欲求だとか、関係性の欲求、そういうものを満たすことを必要としています。

有能さへの欲求というものは、そもそも失敗を克服することで満たされていくのじゃないかと思えます。イチロー選手の話ですけども、4000本を打つには8000回以上はくやしい思いをしている。そこに向き合ってきたという事実が誇りだ、ということですが、そういう失敗を克服することで恐らく有能の欲求も充足されて、自分からやろうという気持ちが起こってくるんじゃないかと思えます。

自律性の欲求は、失敗という状況を自分の力で変化させたいという意味で満たされる。失敗をそのままにしておかないで、自分の力で変化させたいということによって、自律性の欲求が満たされるとすれば、そういう方向に持っていくことが必要です。

それから関係性の欲求は、失敗を克服する際に、手を差し伸べてくれる教師や仲間がいる場合に満たされるんじゃないかと思います。人との関係をうまくやっていく関係性の欲求というものも実は挙げているんですけども、やっぱり失敗を克服する際に先生がうまく援助をするというでしょうか、あるいは仲間と協力してそれを乗り越えていくという、そういう経験によって、自律的な動機づけの方向に少しずつ変えていくことが必要ではないかなと思います。

随分この所だけで長くなってしまいましたが、あと30分ぐらいでもう二つの話をさせていただきます。

## 5. 仮想的有能感

次は、話がちょっと変わって、感情の傾向とか感情特性と言っている人もいるようですが、そういうものは、動因というのでしょうか、押す力の役割を果たしているのではないかと思います。怒りという感情は、当然攻撃という行動、動機づけになるわけですし、感謝というような気持ちがあると、あるいは人に対する向社会的行動といいますか、援助行動とかそういう行動につながっているんじゃないか。有能感という、これ感情だとしますと、それが達成行動とか挑戦行動になっている。そういう意味で、特定の感情傾向の強弱そのものが行動を規定するという見方をしてもいいんじゃないかと思います。

ここで仮想的有能感という概念も、一種の感情傾向、感情特性として位置付けることも可能ではないか。これは要するに他者を軽視する、他人を低く見るとか軽蔑することによって、そのときに自分を持ち上げる、そのときに出てくる自分は偉いといったような有能感、それを問題にしていますので、そういう感情を持ちやすい人というふうで、感情特性ともいえますので、それ自体がいろんな行動の動機づけになるということも考えられるのではないかと思います。

仮想的有能感というものを、この時代たくさんの方が持っているんじゃないかということで、これは具体的な例をちょっと挙げたのですが、ホームレスを襲うような少年の事件が時々、何年かごとによく出てまいります。これは襲う少年自体がホームレスをいわば見下していると、そういう気持ちが実際にホームレスを襲うという行動になるということで、仮想的有能感を持っていることがそういうホームレスを襲う行動

になっている。集団でいじめをするというのも、やっぱり相手をおそらく軽視している、蔑視していることによって起こってくるんじゃないかと思います。それから自分の能力を会社が認めないということで、すぐに3カ月ぐらいで就職しても辞めてしまう人が多くなったという話がありますけども、これも新入社員に仮想的有能感というものが形成されていて、辞めてしまうという行動、そういう動機づけになっているんじゃないかということになります。

赤で書いたのは、これは小学校の先生たちが、小学校でもこんなようなことがありますよということ言っていたもので、ちょっとぴったりとはいかないうなものもあるかもしれませんが、小学生でも仮想的有能感を持っているのではないかと考えます。青の一番下は大人の方でして、子どもの成績の悪さを担任のせいにする。駄目な先生だから、うちの子もはこうだというふうにすぐ言うような親もあります。それから、客室乗務員に暴言を吐く。自分はお客さまだというわけで、乗務員を見下して行動するというようなこともあります。そういった人の中に仮想的有能感というのが含まれているということになります。

あまり長くしゃべっていると残り時間がなくなりますので、早くやっていきますが、仮想的有能感というのは、一応こういう定義をしております。自分の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向から習慣的に生ずる有能さの感覚ということです。他者評価をすることで自己評価を上げると、そういうようなものになっています。普通はそういったものは、ある程度無意識的であり、他者軽視という側面は意識的などころがありますが、仮想的有能感は自分が有能だと感じるというのは、やや無意識的な部分があるんじゃないかということです。ただ測定的にはやっぱり意識的な部分で取らないといけないので、他者軽視を測定して、それを仮想的有能感だというふうに見なす、そういったちょっと変なことを実は測定上やっております。

これは仮想的なもの、あくまで人を蔑視することによって、そのとき自分を持ち上げる、本物でない有能感ですので、一方ではもうちょっと本物的なものも見ておく必要があります。私は一応よく使われている自尊感情、ローゼンバーグの自尊感情の尺度を使って、こちらの本物のほうは測っております。これが他者軽視の尺度でして、項目として、自分の周りには気の利か

ない人が多い、これは他者を軽視しています。これは、そのとおりだと答えれば、非常に仮想的有能感を持っているということになります。気の利かない人が多い、しかし自分は気が利くのだということになります。また、他の人の仕事を見ていると手際が悪いと感じる裏には自分は手際がいいのというような有能感が存在することになります。その背後に仮想的有能感があるというふうに見なしています。これはご存じのローゼンバーグの自尊感情です。

この二つを使いまして、四つのタイプ分けをしています。仮想的有能感と自尊感情の尺度での得点の相関はほとんどございせん。無相関に近いものだと思っただいただいたらいいと思うのですが、仮想的有能感が高く自尊感情も高い。本物も偽りのものも有能感が高いという感じなのですが、これは全能型というふうに名付けております。実際自分に力がある人だと思うのですが、だからこそ相手をばかにするということをやっているような人になります。それに対して、その下に自尊型と申しますのは、自分はそれなりの力や自信をお持ちの方なんですけど、決して他人を見下したりはしないというようなことでして、社会的に非常に望ましい方かなと思います。その下は萎縮型でして、両方とも低い。自尊感情も低いけれど、他人を見下したりもしない。外から見ると、やや萎縮しているような人になるのではないかなと考えます。右の所が、私がおもともと考えていたような方になりますけど、実際には力はない、だからこそある意味で他人を見下して、そのとき有能感を感じず、そういうのでして、これを仮想型というふうに名付けております。

ある所でこういう話をさせていただいたら、「ドラえもん」の登場人物で考えると考えやすいですよ」と言ってくださった方がありまして。全能型はジャイアンで、自尊型はしずかちゃんですか、萎縮型がのび太で、仮想型がスネ夫くんですか。「そのほうが非常に分かりやすいですよ」と言っただいて、確かにそんなところはあるのかなというふうに思いました。

先ほどそういった仮想的有能感がいじめというものに反映しているんじゃないかという話もしたのですが、データとして今度は型にして分けていじめがどうであったかということを見たものであります。身体的いじめについてはこのように、いじめを実際は左側がいじめをしたほうですか、右側がいじめを受けたほうでしたか、そういうことだと思います。身体的いじめに

ついては、やっぱり全能型の人は、自分は力があるからなかなか高いといえます。いじめを受けるほうもやっぱり仮想型、全能型が多いです。仮想的有能感が高い人の方が、いじめるのもいじめられるのも多いというようなパターンになっています。これも言語的ないじめについてもよく似た傾向になっていますが、いじめられるほうは、特に仮想型が他の群に比べて高いというような感じですよ。

それから、間接的いじめと書いてあるのは無視するというような行動になります。これにつきましても、同じような傾向といえば同じ傾向ですけども、いじめられるほうでは、萎縮型の人が無視されるという傾向が非常に強いといえます。全能型の人はそういうことはないという違いがありますが、大きく言いますと、やっぱり仮想的有能感を持つ人、他者軽視の高い人、そういう人は、いじめをすることも多いけれども受けるほうも多い、両方多い、そういう結果になっております。そういう行動に、そういう感情傾向がいじめという行動に結びつく。そこにいじめる動機づけといたしましうか、そういうものが当然働いているだろうということになります。

これはちょっと特殊といえば特殊ですけども、コミュニケーションとの関係はどうかということで見ただけでして、家族とのコミュニケーションの量だとか、友人とのコミュニケーションの量だとか、教師とのコミュニケーションの量だとか、それを調べておりますが、要するに仮想型は、比較的家族とのコミュニケーションとか友人とのコミュニケーションが他の群に比べると低いということがお分かりいただけだと思います。他者を軽視するわけですから、なかなか家族ともうまくいっていない。コミュニケーションが少ないし、友人とのコミュニケーションも少ないというような形ですよ。

何か、いろんなことをぐちゃぐちゃに言って、だんだん散漫になってくるんですけど、これは、前お話ししましたデシたちの自己決定理論に基づく動機づけと、それから有能感タイプといったものの関係を直接見たということになります。これを見ていただくと、私が注目している仮想型というタイプ、これはいわゆるより他律的な動機づけ、完全なる外発的動機づけという言葉でもいいと思いますが、外的動機づけとか、不安だからやるとか恥をかきたくないからやるという、消極的な、いわば自律性の比較的弱い動機づけは非常

に高いんです。ところが、同一化的な動機づけとか、内発的動機づけとかいった自律性の高い動機づけは低いという感じになります。萎縮型は、動機づけの面では一番ある意味で悪いといきましょうか、どの種類の動機づけも低いというような感じになりますし、自尊型なんかは割と自律的な動機づけは高いけど、他律的な動機づけは低いというような感じになります。直接こんなこともやりました。

## 6. プラスマイナスゼロのやる気

さて、最後の話に移りたいと思いますが、最後の話は、まだここ2、3年やろうとしていることですが、名大を定年退職してからはますます研究は遅々として進まなくて、ほとんど進展がないままのものなんですけども、無意識的習慣的動機づけと感情との関係と書きましたが、プラスマイナスゼロのやる気というふうには私はよく書いているんですが、それは加藤登紀子さんがこんなことをある新聞で言っていたというところからきました。ご飯を作って食べる、洗濯もよしたらまた洗うというプラスマイナスゼロの家事の積み重ねが女性の強みになっているというような話をどこかで書いておられまして、これは結局プラスマイナスゼロの仕事なんだというわけです。確かに、用意して、朝ご飯を食べてそれで一旦は終わるんですけど、また昼になったら食事の準備を奥さんはしなくちゃいけないというわけで、洗濯ものでも同じです。毎日毎日洗濯ものがたまっていくわけですので、終わりが無いわけです。それが男の人たちの普通の動機づけの、例えば仕事の動機づけというものであれば、一生懸命やればそれなりの給料がもらえて、それなりの地位が上がってとか、そういういわばプラスプラスというふうには多分言うのだと思うんですけど、そういう動機づけとはずいぶん性質が違う、そういうものだと思うんです。しかしながら、これはわれわれのいわば日常生活の中において、結構多くの部分を占めることでもありますし、実際そういうもので、よく私の知り合いの先生の奥さんも、時々炊事のやる気がなくなるようで、きょうはご飯を作れないと言っていたから、その先生がスーパーで何か買っていかなくちゃいけないと言っておられるのですが、確かにやる気が萎えてしまうこともあるようです。日頃は無意識的に行動していることの中にも動機づけの強弱が隠されているよう

に思います。

普通のやり方で、どういふときになぜ家事の動機づけが生じるのかということではいろいろ意見を集めまして、そしてそれを因子分析を致しましてまとめたというのが大体これになります。興味関心、効力感というので、これはやるのが本当に楽しい内発的動機づけなんですけど、家事に関心がある、達成感が得られる、こういう方もおられます。それから、義務感というのはちょっと強く、承認希求感とか言ったほうがいいのかもかもしれませんが、家族に嫌われたくないから、やらないと誰かに何か言われそうだから、やらないと恥だからということでやっているという方もございます。それから、生活習慣になってしまっていて、やるのが習慣だからとか、あまり考えずに自然と手が出るとか、気付いたらやり始めているからというやる気もあります。さらに生活必要感というわけで、健康に生きるために大事なことからやる。生きるためにはやらなければならないことだから、やらねば生活できないからということ生じるやる気です。それから5番目が、代替者不在感とっているんですけど、誰もやってくれなく、代わってくれる人がいないから、やれるのは私しかいないから、しょうがないからやるというようなことで、一応五つの因子に分かれております。

これは、5段階評価で尋ねていますが、どれが高かったかといいますと、上の三つが高いんです。代替者不在感、生活必要感、生活習慣です。興味関心であるというのは確かにありましたけど、それは平均値そのものはあまり高くはない。そういうやる気もあることはあるんですけど、あまり頻繁に機能しているわけではない。さらに義務感といきましょうか、承認希求感でやるというのもそれほど多くない。上の三つでやるということが多いというふうに考えていただいたらいいかと思います。

これは非常に見にくいんですけど、家事といひましても、炊事と洗濯と掃除、その三つに分けて、実際どのくらいやっているのかを示しています (Figure 3)。それと、動機づけの高さのそれぞれの相関を見たということになります。そうすると、真ん中が生活習慣になっておりまして、一番右が代替者不在感となります。やっぱり相関が高いのは後ろの三つ、評定値が高かったものが多いのですが、興味関心とか効力感とか義務感といったものは、実際の炊事量とか洗濯量、そういった家事量との相関はあまり実には高くありませ

んでした。そういうのもあるんだけど、実際それは行動量に反映しているわけではないんです。

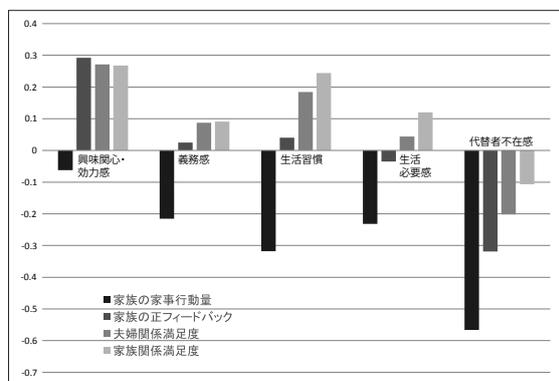


Figure 3 家事の動機づけと人間関係 (相関係数)

そういう家事の動機づけを規定する要因として、年代だとか、仕事をしているか、していないかとか、既婚か未婚かとか、パーソナリティーはBig-5を使って、小塩先生の10項目のBig-5の項目があるんですけど、これを使って測定しています。価値づけとといいますのは、これは重要に思っているかどうか。家庭生活を重要に思っているかどうか、余暇を重要に思っているか、それぞれの重要度を聞いています。それから、平等主義的性役割感といったものをどのくらい感じているかとかも尋ねています。さらに人間関係の満足度で夫婦関係、家族関係、どのくらい満足しているとか、家事をやった時、家族からの肯定的フィードバックがどのくらいあるとか、家事量、自分はどのくらいやって、家族はどのくらいやるかとか、主観的幸福感がどうかといったようなものも尋ねております。

価値づけといたしましうか、何を大事にしているか。家庭、余暇、職場、習い事、友人関係って、その重要さの程度とそれぞれの動機づけがどういう関係をしているかということとして、やっぱり家庭を大事にしているという人は家事の動機づけは一般には高いです。特に、生活習慣というのでは高くなっております。

それから、あとのことについては、むしろネガティブなマイナスの相関が出ております。小さいですけど出ている。こちら辺が、ちょっとこれは家族の家事行動量も入っていますので人間関係だけではないのですが、一番左側の赤いのは、家族がどのくらい家事をしているかということとして、これはどの因子とも負の相関になっています。他の家族があまりやっていないから自分がやっているということになるかと思えます。

特に、一番右の代替者不在感は、誰もやる人がいないからというのは当然ですけども、家族の人が家事をやっていないということも非常に関係が深いです。でも生活習慣でも実は相関はあります。しかし、違うのは、正のフィードバックがあるとか、夫婦関係が満足だとか、家族関係が満足だとかいった程度とその動機づけの高さにつきましては、生活習慣とは正の相関が出ているわけですが、代替者不在感とは、非常にネガティブな相関です。正のフィードバックがないほど自分だけやらずにちゃいけなくて、夫婦関係が不満なほど自分だけでやらずにちゃいけなくて、家族関係が不満なほど自分だけでやらずにちゃいけなくて。そういったような感じになります。

主観的幸福感というのを取っていますが、これは普通の単に相関ですけど、こんなふうになっていまして、興味、関心、効力感というのは、これは非常に高いのは当然ですが、生活習慣という、普通に習慣になってしまっていると、あまり意識してないってやっていると、実はこれは正の相関が出ております。ところが代替者不在感は低いものになっています。代替者不在感はマイナスの0.068というわけです。幸福ではないという、非常に低いからあまり言えないんですけど、そういうことになると思えます。

## 7. 感情と動機づけ

話はまた全体的な話に移っていくのですが、感情と動機づけとの関係ということになりますと、感情はものすごく単純化して言えば、ポジティブ感情とネガティブ感情がありまして、そしてそれらの感情の中でも非常に活性化が強い感情と弱い感情があるというふうに考えます。そして、どうい感情が生じたときにどれほどの動機づけが起こるかをものすごく単純化して書いたものが左になりますが、おそらくネガティブ感情のほうが強く動機づけに作用するんじゃないか、怒りとかくやしさと不満という、そういった活性化が強い感情が生まれたときに、やっぱり動機づけは高くなるんじゃないかなと私自身は思っています (Figure 4)。だけど逆に活性化が弱い、悲しみとか落胆とかたいくつとかいったような活性化が弱いものは、もう本当にやる気がしないということで、動機づけは非常に低くなるんじゃないかと思えます。ポジティブ感情はそれほど傾斜は急ではないんですけど、やっ

ぱり活性化が強い、楽しい、面白いとか、誇りとか、そういったものについてはもちろん動機づけを高めることになるかと思えます。それからリラックスとか安心というのも、これはそれに比べたら動機づけは低いですが、悲しみや落胆やたいくつのときほどやる気がないわけではないというようなことで、極めて大まかにはそういう関係があるんじゃないかなというふうに思っております。

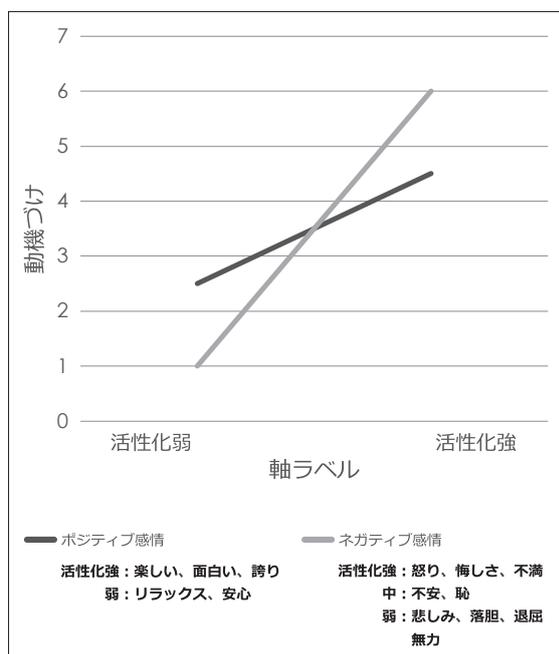


Figure 4 感情と動機づけの分類

それで、先ほどの話で、家事の動機づけの場合ですが、家事の動機づけの場合は、一般には左側のような、あまりやりたくないというような、やりたくないといひましようか、感情的にも、ああやらなくちゃいかなのか、というような人が多いと思うのですが、実はある状況のときに一つの感情だけを持つということではなくて、やっぱりそれと別のポジティブな感情も持つこともあるわけですし、例えば先ほどお示しました生活習慣でやっている人は、非常に幸福感が高いとか、人間関係がいいとか、そういうようなことがございまして、そういうようなことがあると、上のポジティブな感情があるときに、下のネガティブな感情が上に引っ張られて、そしてあまり意識しなくてもやるようになるといひましようか、そんなことが起こっているんじゃないか。しかしながら、代替者不在感のようなものを感じる人は、そういったポジティブ

な感情が周りにありませんので、他の家族との人間関係も夫との人間関係も悪いとか、家族も助けてくれないとかいうことで、非常に不幸な感じで、周りのネガティブな感情にも包まれているということで、より低いレベルになってしまうのではないかなということをお思います。

右のほうは、これは学習意欲のことで話しましたように、確かに面白いとか楽しいでやればやる気は上がるのですが、それだけでは私は駄目なような気がしまして、ネガティブな感情もやっぱり一方ではあることによって、そのポジティブな感情がより生きるといひましようか、本当の動機づけにつながるとお考えます。そういう両方が融合してプラスの動機づけになると思われまます。これは全く勝手な私の妄想というか、いい加減な仮説ですので、いろいろご指摘をいただければ結構ですが、そんなような気がいたします。

## 8. 誘因と動機づけ

一応動因の話をきょうは中心にさせていただいたのですが、誘因の話はどうなっているんだと言われると、こちらはあまり勉強が進んでおりませんし、どういふふうに考えたらいいか、なかなか私もよく分かっていないですけども、おそらく進めていけば、誘因というのはやっぱりその時々目標の自分にとっての意味とか価値とか、そういうものとして位置付けられるのではないのかなというふうにはぼんやりながら思っております。価値は本来目標に付随するものでありますが、その行動が繰り返されることで、価値自体が主体の動因として働くこともあるんじゃないか。一番最初に申し上げたように、授業中に面白い課題を出して、どんどんやらせることによって、そして主体者側の中に本当のやる気を作っていくというようなことをおそらく目指しているでしょうから、誘因を動因にしていく、そういうことはあり得るんじゃないかとお考えます。親から言われた英語の勉強の重要性、重要だと言われただけでですけども、それが社会的な価値として、誘因として最初あるわけですけど、実際それに対して勉強するという行動がありますと、そしてだんだん勉強する中で、英語の魅力といひましようか重要性といひましようか、そういうものが増えてくるようになると、もちろん誘因価も高くなりますが、その分だけまた動因のほうも高まっていく、そういうことが起こっているん

じゃないかなと思います。

誘因は基本的には外的環境に、その時々目標ということにしますと、外的環境によって変化します。しかしながら、自分で自分の目標を立てて、そして自分はこういう人になりたいとかいうのも一つの誘因だと思いますので、自分で作っている部分もあります。ある目標の誘因が遂行中にも減少したり増大したりする。もちろんこれは、成功、失敗ということもあったり、いろいろ課題なり、それに取り組む中で変化していくものだと思います。そして誘因の増減が動因の増減に反映されることがあると考えられます。誘因は動因よりは空間的にも時間的にも狭いといいたいまいしょうか、その時々で変わりますし、この誘因、あの誘因というふうに、いろいろな誘因を想定する意味で、空間的にも時間的にも狭いということになるんじゃないかなと思います。でもそれは、基本的にはそのとき、そのときで、自分にとってそれがどれくらい重要か、意味があるかということで、それは面白いから意味がある、いろいろな意味での意味ですけども、その時々的重要性みたいなものとして考えればいいのかあというのが私の大まかな推測です。

## 9. まとめ

だいぶ時間が押してきました。まとめとしてはこんなことで、動機づけにおいて、感情は動因的な役割を果たすんじゃないかと考えます。学習場面での課題の工夫などは独自の環境や感情が誘因的な役割にとどまっていたり動因化していないと悪影響の場合があるのではないかと思います。ポジティブな感情だけでなく、ネガティブな感情も動機づけに強い影響を及ぼす。教育場面でも、それを避けようとするのではなく、導入することも一つの考えです。具体的にどうやってやるかというのは、本当にこれは難しいことだと思いますが、私若い頃にいくつか、一応教育心理学者ですので、授業を見させていただいたことがあるのですが、授業中、確かに課題も面白いことをされてやられるんですが、その先生、基本的には非常に厳しかったです。従って子どもたちはネガティブな感情も抱いていたはずで、そういったようなことも少し関係するんですが、ある意味では両方うまく持っていないと、とにかく面白い課題を楽しくやればいいですよ、だけではあまり効果がないような気がいたします。

ネガティブ感情傾向特性としての仮想的有能感も一つの動因としてさまざまな行動を予測できるんじゃないかと考えます。家事のような無意識的な行動にも動機づけは存在しまして、無意識的に行動できるために周りにポジティブな感情が存在する必要がある。私は今日、家事のことをお話しましたが、最近子育てのやる気にも注目しています。ただ、子育ては子どもの成長の喜びがありますので、プラスマイナスゼロとは言えないかもしれませんが、でも子育ても無意識的などころがあります。もう少しネガティブなのは、いわば介護の動機づけとか、こういうのも無意識的に行っている人も、怒りながらやっている人もいますけども、とにかく今までの動機づけとは違う対象だと思いますので、そういったものも明らかにする必要はあるんじゃないかなと思います。

誘因は、そのときの目標の価値に相当すると考えます。これはあくまで推測です。そして、その誘因にむけてポジティブな経験を重ねますと、それは動因化していくというふうに見るのがいいんじゃないかと思えます。

すみません。だいぶ時間超過いたしました、ありがとうございました。

(この後の質疑応答部分は削除しました)

角山 ありがとうございました。本日はたくさんのかたがたお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。今の議論の進み具合からすると、もうちょっと時間を取らせていただいたほうがよろしいんじゃないかと思えますけれども、申し訳ございません。

本学にはモチベーション行動科学部という、まさしくこのモチベーションというのを冠しておりますが、全国で類似の学部はありません。きょうのお話の中では、速水先生は教育のフィールドでの研究が長かったんですけども、そこから広げて、家事の問題まで広げられた。家事の問題のモチベーションって、私きょうお話しうまであんまり考えていなかったこととございます。さらに広がりをもっともっとあるのだと思います。

このフォーラムは、次回来年2月ぐらいにございます。アンケートをお願いしておりますけれども、そちらにもご希望等のごことがございましたら、どうぞお書きいただきたいと思えます。

それから、受付の所にいろいろありますけれども、毎年ジャーナル、雑誌も出しております。他の学会との関連での共催のイベントなども考えております。いろんな活動をしておりますので、今後ともどうぞいろいろこちらからの発信等にお応えいただければありがたいと思います。

私はこの後もうちょっと個人的に、特に私はきょうのお話の中では、個人の要因の辺り、もうちょっとお話を伺いたかったなあと思いますので、その辺を後でお話をお伺いさせていただきたいと思っております。

それでは、本日はどうも皆さんがありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願ひします。先生ありがとうございました。

## 講師紹介

速水敏彦（はやみずとしひこ）氏。昭和22年生まれ。中部大学人文学部心理学科教授。名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（教育心理学専攻）単位取得満期退学。教育学博士。大阪教育大学助手を経て、名古屋大学教育学部助教授、教授。この間、名古屋大学教育学部附属中高等学校長、名古屋大学大学院教育発達科学研究科長を歴任。2012年名古屋大学定年退職・名古屋大学名誉教授。

主著に、『自己形成の心理学—自律的動機づけ』（金子書房 1988）、『他人を見下す若者たち』（講談社現代新書 2006）、『感情的動機づけ理論の展開—やる気の素顔—』（ナカニシヤ出版 2012）、（以上単著）、『動機づけの発達心理学』（有斐閣 1995）、『生きる力をつける教育心理学』（ナカニシヤ出版 2001）、『仮想的有能感の心理学—他人を見下す若者を検証する—』（北大路書房 2012）、『コンピテンス—個人の発達とよりよい社会形成のために—』（ナカニシヤ出版 2012）、『教育と学びの心理学—基礎力のある教師になるために—』（名古屋大学出版会 2013）（以上共著）、その他著書・論文多数。

（東京未来大学モチベーション研究所フォーラム  
～well-beingをめざし明日へのモチベーションをはぐくむために～

第4回 日時：平成26年10月18日（土）15時～17時  
場所：東京未来大学みらいホール